



上映映画解説

1957, 5~6

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー

No. 47

ヨーロッパの何処かで

「ヨーロッパの何処かで」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきましたが、今回はその第二七回として、五月二日から六月五日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）「ヨーロッパの何処かで」を上映します。

特別鑑賞会で戦後の映画をとり上げるのは、これはじめてですが、この映画は日本では一九五二年二月二日、スバル座で初公開され、また一九四九年六月、国連映画委員会の推奨を受けるなど、国際的な反響を呼び、ハンガリー映画の名を高めた作品です。

「ヨーロッパの何処かで」

ラドヴァニイ映画一九四八年製作

—— スタッフ ——

監督……………ゲザ・ラドヴァニイ
脚本……………ヴェラ・バラアジュ

撮影監督……………ゲザ・ラドヴァニイ
音楽……………バルナバシシュ・ヘジ

……………デ・ネジシュ・ブダイ
———— キャスト ————

老音楽家……………アルトゥル・ショムライ
ペーテル……………ミクロシュ・ガポール
エヴァ……………ジュジャ・バーンキ
タクシ……………ラースロ・ホルヴァト

ハンガリー映画の現在

牛 原 虚 彦

ハンガリーの首都ブダペストはドナウ河をはさんだブダとペストの二つの地域からなっている。ペストに国立第一撮影所、映画高等専門学校、フィルム・ライブラリー、ブダに国立第二撮影所、翻訳映画製作所（外国映画ハンガリー版製作）などがある。ハンガリーの

映画製作の歴史はふるく、第一撮影所は一九一六年に創設された旧民間撮影所を近代的に改善拡充したものである。撮影所はどれもソヴィエト、イギリス、フランスなどの新鋭機材で装備され、その増設も進行中であつた。しかし、その製産量は、きわめて少ない。

一九五五年度の製作本数は劇映画一、記録映画五、ニュース映画各週一で、とうてい自国映画のみで大衆の要望をみたしきれない。一九五二年にチェコスロヴァキアで世界したハンガリー人で世界的に名の知れた映画理論家（映画の理論「其他の著者」のヴェラ・バラアジュやソヴィエトの故ブドフキン監督（ハンガリーに二年間滞在した）なども理論と実践の面でハンガリー映画人のよき相談相手となつた時代もあつた。しかし、現在のハンガリー映画人は理論や技術の研究も活潑でなく、映画作家の活動も、みんな「わが道を行く」といった有様で、製作量過少の最大の原因は国の財政の貧困、企画脚本、技術経験の不足にあると謙虚に反省している。

一九五五年秋、私がブダペストを訪問したとき、ハンガリーには一四名の劇映画監督がいた。代表的な監督は「ヨーロッパの何処かで」のゲザ・ラドヴァニイ、ゾルタン・ファブリ（「ジョルジュ・ダンダン」）、ラズロ・ラノディ（「ギャップ」）、フリジエス・バン（「われらの大地」）、この監督は、この作品以来既に「コジウト大賞」を三回も受けている。チャアルズ・マク（「第九号病棟」）、ゾルタン・ヴァルコニイ（「奇妙な符号」）などである。

「われらの大地」は一九四八年度の作品、貧農と富農の耕地の争いを描いた作品、「ヨーロッパの何処かで」とともに戦後のハンガリー映画復興の先駆的役割をはたした傑作といわれている。

ラドヴァニイ、バンの二人を老練第一線とすれば、最も将来を期待されているのはチャアルズ・マクで、その「第九号病棟」（一九五五年度作品）は国立病院の官僚主義と腐敗、そしてその犠牲となる患者の労働者を鋭いタッチで描いた秀作である。



前述のように作品の量は、きわめて少ない。またハンガリーの映画人は、その芸術的価値についてもひどく謙遜するが、ハンガリー映画の量に比較すると、質の優れた作品の率は、たいへん高く、ことに私たち日本人の心に強く訴える作品が多い。撮影所の懇談会で、若い監督のコザが菊池寛、芥川竜之介、現代作家の里見淳、志賀直哉諸先生の愛読者であることを知って「ここに日本文学の研究者がいるとは」とおどろいた私に「研究者といわれて顔が赤くなる。日本文学は僕に、びったりくるので好きなのです。」と微笑んだ彼の澄みきった眼を、私はいまも忘れ得ぬ。私は、そこに東方の血のつながりをみつけた気がしたのである。

国立映画専門学校の卒業製作のひとつの「帰宅」（ようやく釈放されて捕虜生活を終え、十年ぶりに帰国する男と不幸な妻を描く短篇劇映画）にしても、この夫婦の傷ましい再会の心理描写は、しみじみと静かで、しかも激情をたたえていて優れた日本映画の越き深いものがあつた。

この映画高等専門学校には国中からの英才が集まり国費で専門教育をうけており、最近の卒業生ではタマス・ヴァノヴィチ（「ジプシイは踊る」）、色彩短篇、東和映画輸入、未公開）などがいて、明日のハンガリー映画のために活躍している。わが国にも、いますこしハンガリー映画を輸入したいものである。

（フィルム・ライブラリー運営委員）
写真は、ペストのハンガリー国立映画高等専門学校、卒業製作の現状（学校内のスタジオにて一筆者撮影）